

# 幼少年のしつけ・教育の基本問題をめぐって

横 田 貢

## On the Problem of a Fundamental Education, Training in Childhood.

Mitsugi Yokota

### まえがき

平成8年1月初めの朝日新聞の「こころ」欄に、瀬戸内晴美と中野孝次の対談が載っていた。

瀬戸内は、「いまの大学生は講義をきかない。先生たちも、今の学生は教室でしゃべるものだとあきらめている」と嘆いた。「人間と人間が接触するという基本が小学校からないんだな。中学も高校も管理ばかりだ」と、中野は惨状を指摘した。

ほんとうにそうであろうか。身の回りに目を向けよう。筆者の住所近く（台東区橋場）の幼稚園の例に耳を傾ける。

近頃幼稚園では、送り迎えのお母さん同士の間には挨拶らしきあいさつが消えた、というのである。朝母親が子どもとともに登園する。目の前にいる先生には一言の反応も示さず、わが子の友達の一人か二人に声を掛けて、去ってしまうらしい。こうした傾向は、すでに数年前から目立ち出したが、近年とみに著しくなったとの事である。

昭和42年愛知県科学教育センターの行った調査に、こんな数字が現れる。

「父母、教師のみた現代っ子の特徴」として試みた20項目の中で、一位は、ねばりがなくあきやすい、父母教師合わせて92%、二位は、長上を敬う念が乏しく、礼儀・ことばが悪い、82%であった。

昭和40年代（1960年代）から、もはや人の尊厳を認める気持ちは薄れ始めたか。1970年代には、昭和元禄などの呼び名も流行り、子どもの心は従来の社会から次第に遠ざかり出したのかもしれない。

子どもの心が変わり、若い世代に変化が起これば、教育現場の移り行きもまた自然の赴くところかもしれぬ。だが、お受験などに集約された家庭エゴイズム、児童英検などに見える過熱教育、これらをただなるがままに任せるといふわけにはいくまい。

子どもが変わり、若者の心が見えにくくなり、教育は難しくなった。この根源には、正に社会の要素の複合した諸種の事情があろう。教育のことは、まず教育内部から考えてみねばならぬ。

本稿では、子どもの成長の一大土台ともいふべき幼少期（幼稚園・小学校の時期）のしつけ、ことばなどに注目し、実態の一つに触れながら、あってほしい姿に向けて一言提示を試みようとするものである。

### 今、幼稚園での子ども達は

最近の学生は、「住専問題どう思う」などと聞くと、「いや、何とも言えない」、「いやア僕も同

じです」と答えて、話が続かない。

なぜ話がはずまないのか、いろいろ原因はあろう。一つには、彼らの幼少時に経験した教育の係わることも確かであろう。中でも幼稚園での体験・教育は、見逃すわけにはいくまい。

過日、幼稚園の園長塚越アサ子先生から助言を得た。二、三紹介してみよう。

### ■自主性とことば

最近の園児には、自主的な行動、自主的表現の薄れた子が増えた、と言う。登園してもほとんど身体を動かさず、何げなくたたずむ子が、やたらに目に付く。こちらが「おはよう」と言ってせい一杯の表情を示しても、応えない子が少なくない、というのである。

先日、水飲み場まで元気よく行ったものの、そこにじっと立ち尽くした子を見た。「どうしたの」と聞いても特に反応は返らない。「水がほしいの」と言ったら、始めてそこで「うん」と最小の表現が返ってきた、というではないか。

江戸時代の番頭ではないが、最近目から鼻へ抜けるような母親が目立ってきた。彼女らは、その場の事情をす早く察知し、子どもの心を読み取り先回りする。子どもは、無能な王様のように黙って立って素振りですす。それでおおよそ望みは、叶う。勢い、自己の思いをことばに移す仕事は、無用となる。

子どもは、何事につけてもただ黙っていればよいのである。これほど楽で、ありがたいことはない。ことばを使う苦勞の要らない習慣が、次第に出来上がっていく。母親だけがいやが上にも冴え、子どもはただただお地蔵さんと化するのである。

ことばは、その場その場の場面いかに適応するか積み重ねで育つし、身にも付く。<sup>1)</sup> 最も大事な、その場面をお母さんの利口な頭が奪ってしまう、というわけである。恐ろしい。

### ■自立のしつけ

乳幼児の成長、自立に欠かせないのは、まず第一に食うこと（離乳）と出すこと（排泄）のしつけであろう。排泄は、二～三歳の頃に越えねばならぬ、成長に向けての一大ハードルである。フロイドの心理学が、リビドーと称する性的エネルギーに基づき、排泄を重視したもの、子どもの発達にとってのこの重みを考えたからである。

ところが驚くなかれ、幼稚園の現実はこうだと言う。在園5歳児のおおよそ20%（26人中の5人）が、夜就寝時に市販のおむつを当てるとの事である。聞けばお母さんは、夜中に一々起こすのは面倒、大変という気持ちから御身ご大切を願って子どもには安全おしめ、となるらしい。ここには、子どもの命の大切な成長、保育より、自分の睡眠、健康優先の姿勢だけが、ありありと見える。

朝定刻にひとりで起きる習慣のしつけも、もう一步という子が、少なくないらしい。朝起きられない、起こしても起きない子が、全体の半分はいるとの事である。連動して、朝食も半分以上の子が取らないままとの話である。こうした朝起きのまずさは、最近の子の夜型人間化の問題と無縁ではない。幼稚園児も、すでに夜型の波に侵されてきたらしい。

夜起きていて、目がさえる。遅くなれば空腹にもなる。何か少し食べ物を入れて、空腹をごまかす。これでは、朝起きにくいし、食欲ももう一つさえない。1987年のNHKの調査<sup>2)</sup>によれば、朝、食欲がない、との答えが、中学生、高校生とともに39%の数に達している。

週に二、三度調整のための配慮・努力が必要となろう。

### ■実りの薄い親子の対話

幼稚園では、このところ、無表情で目の合わせにくい子、焦点の定まらぬ子が増えた、といわ

れる。

「子どもとことばの会」のメンバーの今井和子も、「赤ちゃんでも視線がしっかり合う子がへっているように思います。目と目が合ったと思ってもすぐそらしてしまうので、こちらがサインをおくる間がないのです<sup>3)</sup>」と指摘する。明らかに、家庭内での母子の対話、幼児と家族の生きた対話が薄れた様子を物語る。

専業主婦でないお母さんが、50パーセントを越える<sup>4)</sup>時代でもある。今の家庭では、おそらく親子の向き合い、ほんのりした場面が消えかけているのであろう。多くの子どもは、テレビの画面とにらめっこ、テレビ音波の受信器と化して、時を過ごす。聞こえてくる母親の声といえば、ほとんど指示ばかり、「宿題ないの」・「塾の時間よ」・「遅れないように」・「忘れ物ないの」・「あんまり長い時間遊んじゃだめよ」などなどである。

子どもがお母さんに懸命に話しかけたりすれば、空振りに終わったりすることが多い。「ちよつと待ってよ。ママ、今手が空かないのよ。後で聞いてあげるから、ゴメンネ」といったことになりかねない。

子どもがテレビを見始めると、子どもの傍らで一緒に話しながら見るお母さんは、ほとんどいない。子どもは、番組上演の長時間、テレビの前で無言劇に漬かりっ切りというわけである。母子の間に、これでは温かい対話の交わされる機会は育ちににくい、といわざるを得ない。

#### ■遊びに対話とと思うが……

幼稚園の子同士で、一人が「今日遊ぼうか」と聞くと、「ダメ、今日お稽古に行くから」となつて、自由に遊びはなかなか成立しないらしい。

幼稚園児や小学生も、正にダブルスクールの時代となった。お受験母親がこれをガッチリ支え、むしろ年々強化役の担い手として活躍する。筆者の地元の台東区清川保育園の園長の話によれば、全園児のおよそ三割は、何かの形でどこかの塾やお稽古所と契約をしているとの事である。

偏差値、知能が最優先される時代である。ブランド好みのお母さんは、ひたすらこの街道を突き進む。人として相手への思い遣り、助け合い、自然界への感動、そんな気持ちより、知能、技能第一とばかりお母さんは、わが子の頭に期待を込める。幼稚園も、人間総合教育の園より、計算、漢字などを教えてくれるところが人気上々、と聞く。

と、こんな背景で、子どもが子ども同士で、自由に遊び、飛び回り、話しを交えるチャンスは、いよいよ消え去るだけとなつていく。これでは子どもどうしてぶつかり合いながら、考えたり、相談したり、いろいろ表現したり、アイディアに気づいたり活動は、薬にしたくも無くなるのである。

#### ある小学校の深い嘆き

筆者の地元石浜小学校のベテラン、桜井教諭の話である。ある日こんな驚きにぶつかったと、言う。

#### ■教育とは受験準備のこと

高学年のある男の子が、運動会のリレーの選手に選ばれた。ある日運動会に備えて練習が始まった。その子どもも、喜び勇んで練習に参加し、汗を流していた。

と、そこへ血相変えた母親が現れた。担当の先生に向かい、「うちの子どもにリレーなんかやらせないで下さい。塾に行く時間がなくなるから。リレーなんか何の役にも立たないじゃないですか……」と、はき捨てるように言い放ち、後も振り向かず連れて帰ってしまった、というのであ

る。

偏差値と学歴ブランドに染まり切った、今のお母さんの一つの顔が、ここにある。彼女らにとって子どもは、知能・技能の選手候補であり、そのための教育といえ、有名学習塾にほかならない。

知り合いの親子に、こんな人もいた。

ご三家といわれるK中学を目指す、母子であった。受験の近づいたある日、いささか風邪気味の子どもには、学校は数日間の休暇を取らせ、某有名塾特訓問題に専念させ何とか幸運を得た、というお話である。

いかに塾だけが、頼りに値するかで、いかに学校はただの脇役に過ぎないか、を語る代表例と言えよう。類例は20年以上前からあったとも聞かし、筆者もまた体験して来た。今日の塾へ傾斜の勢いは、例えようにもすべのないもの凄さである。台東区立小島小学校の調査では、塾・お稽古のいずれにも通っていない子は、全児童の1割と示される。また『子ども白書'95』によれば、学校での放課後活動は、小学生で平均19分、中学生で47分とあり、逆に塾など外の機関での消費時間は、小学生、1時間13分、中学生で2時間18分と知らされる。

正に公教育、全人間教育よ、どこへ行くと嘆かざるを得ない。だがもちろん、こうした難局の中で各地の小学校・幼稚園では、様々な体験学習を取り入れ、健康教育・ことば・社会性の教育などアイデアを出し合い、実りある実践に成果を挙げている点の多いことも、忘れてはなるまい。

### ■あやまれない子ども

まさか、オウム裁判の影響ではあるまい。自分がどこまで成長しているのか、どう心が働いているのか、黙秘して自分を見せない子が増えた、という。

忘れ物をする。窓ガラスを割ったりする。身近に呼んで注意したり、話し合ったり、当方が一心に呼びかけても、子どもは黙ったままというケースが多らしい。子どもが喧嘩をしたとする。それぞれの事情を十分聞き、喧嘩両成敗、仲直りのあいさつで「ごめんね」を言わせようとする。ところがおたがい容易に、「ごめんね」の一言が出ない、といわれる。

あいさつは、ことばのはたらきの中で、いわゆる言語交際機能<sup>5)</sup>と呼ばれる。お互いに認め合う一歩を作り、心の窓を開ける用意に入るはたらきでもある。人間関係のきっかけ作りに、不可欠の要素でもあろう。かつて吉川英治は、「あいさつは人生のパスポート」<sup>6)</sup> といった。そのパスポートを失ったのである。

これがうまく出来ないとは、現代を生きる子どもの心の、あれこれ迷い思う複雑さのせいであろうか。いやそんなに多くの子どもが、心を病んでいるとは、到底思えるわけもない。やはり幼年時代からのしつけの不足・ピント外れ、もの分かりのよい母親の察しなどが大きな要因、と言わねばならぬ。

瀬田浩子、山添正によれば、「日本の母親は、制作や表現という、言語・知能面の発達をアメリカの母親より重視している。それに対してアメリカの母親は、日本の母親より对人的処置能力を重視している。」と説かれる。アメリカのもの真似はお笑いであるが、ここは大いに耳を傾ける要がある、と強調したい。

あいさつでつまずけば、最小限の必要伝達もままならない。

隣の組の先生から、ある書類を担当の先生に渡すように、頼まれた子がいる。運び役のその

子は書類を受け取り、自分の担任の先生に、「ハイこれ」とだけ言って、手渡してしまうそうである。

なぜ「先生、運動会の書類、〇〇先生から預かって来ました。よろしくお願いします」ぐらいは、言えないのか。口の利きにくい障害児でもあるまい。ついこう言いたくもなる。

用件は誰もが、簡略に済ませたい。言語伝達も略せるだけ略し、手軽に済むに越したことはない。子どもは、日頃からいちいち面倒な言い方を避けてノンバーバルで行くなら行け、とでも思い込んでいるのであろうか。いやそれとも、仲間ことばに慣れ過ぎた彼らは、どんな場面も仲間ことばで間に合わせるということかもしれない。しかも、ほんの二、三人で通じる仲間のことばで。

日本語は、もともと場面依存の高いことばである。親しい二人の会話で一人が、「ゆうべの、すごかったネ」と言う。ゆうべのナイターでヤクルト・巨人の試合を観て感激を共にしていれば、これで十分話を通じる。特に主語の何が、は要らないで済む。だが場面が変わり、親しくない相手に対する場合これでは済むはずもない。

子どもは、いつも自分本位、二、三人の仲間と過ごす自分の場面しか想定しない。大学生でも、「オレ単位大丈夫、先生」などと不用意に言うてくることがある。子どもらには、まず場面を意識させることが第一である。その都度場の意識を持たせ、伝達の目的・テーマを自覚させねばなるまい。

そうしたことばの使い方の訓練では、一つの機関が、出来れば組織を挙げて取り組む必要がある。台東区立小島小学校の猪股和子教頭によれば、「明るいあいさつ、強い身体」の実践年間目標のもと、「ハイ・イイエ」の返事の仕方に始まり、「ありがとう・ごめんね（なさい）」の挨拶を徹底、伝達用件など「なんのため、なんについて」の自覚をもって述べさせ、大成功している、と聞いた。

### ■ことばの問題、親子のずれ

保護者を開くと、親は必ずことばの悪さを持ち出す。特に、「バカヤロー、このヤロー、てめえ」の卑罵語が、親は気になるらしい。

だが子どもにいわせれば、これはあいさつ語的慣用表現、応答詞並みの扱いのようで、大事に及ぶことはあるまい。これが発端で、トラブルが起こった話も聞かないのである。

幼稚化したことばを使う傾向が、一部にあるともいう。テレビのコマーシャルやアニメマンガの影響か、と見られる。特にテレビコマーシャルでは、女の子が舌を下前歯の裏につき出し、甘えの発声をする例が多い。幸い遊びの範囲に止まるものが大部分で、これも心配のタネにはなるまい。

流行語・新語などは、あまり目立たないが、あだ名は問題になることがある、と聞く。

一つは、相手を動物名で呼ぶいい方がある。キツネ・タヌキ・サル・カバ・ゴリラと、昔風の言い方から、カメレオン・アリゾグク・アザラシ・イルカなどの今もどきの呼び名が、巧みに使われるらしい。

一つは、体型に絡んで生まれた語が、気になる。デブ・チビ・ガリ（ヤセ）といった表現である。一頃のような、「キタネエ・クセエ・ノロマ」という様子、行動についてのものは、減ってきたともいう。

問題は、これらのあだ名の使い方に遊びの要素が多いか少ないか、に尽きよう。江戸時代の末期などは、それこそ八百屋の店先に並ぶ品物に相手を例え、笑い合い、けなし合った姿がよくあっ

た。かぼちやヤロー、とうなす、うらなりとうなす、へちまヤロー、だいこんヤローなどなどである。

「この唐なすのもとなり野郎め」、「薬缶でゆでた蛸じゃあるめえし」、「大音寺前のどぶじゃあるめえし」、「目鼻がなけりゃアわさびおろしという面」、「一ト山三文のさつまいも……」といった具合で、「どうでエ、うまい言い草じゃねエか」とばかり自分の満足ぶりが主であった。相手へのけなし、攻撃もほどほどであった。

子ども達のあだ名振り回しも、相手の反応如何によっては許されよう。クマと呼んでも、相手がさして気にも止めず、その場が流れる様なら、別に問題はない。少なくとも大勢ではやし立てるのは控えるとか、相手が何かのショックで落ち込んでいる時は止めようとか、たがいに注意し合う知恵が、必要となる。

あだ名の浴びせ掛けで、不登校にまで追い込まれた例もある。どんなつもりである呼び名が使われ、本人はそれをどう受けているか、日頃の十分な観察と個人指導が、時には重要である。指導者は、あだ名勢力図のようなものを持たれることを期待したい。

### ■変わり果て行くお母さん

子どもが忘れ物をして、それを子どもに届けに来る。お母さんの中には、そばの先生には知らん顔のままが急増してきた。

少し子どもに委員など頼むと、そんな役をうちの子に押しつけないでくれ、勉強が遅れる、と言ってくるお母さんがいる。先にも述べたように、わが子の学年代表リレー選手もさっさと止めさせ、引き連れて帰る。

子どもがおかしくなった裏には、お母さんの変わり行く姿がある。教育現場のお話には、「お母さん自身が、もう現代版なんで……」ということばが、よく出てくる。

一体お母さんは、子育てについてどう変わったのか。

詫摩武俊の調査を参考にしてみよう。『伸びてゆく子どもたち』という著書の中で、彼は、同じ学校を卒業した戦前世代（平均年齢67歳）と戦後の世代（平均32歳）と、それぞれの母親意識を比較した次表を紹介している。

表 I

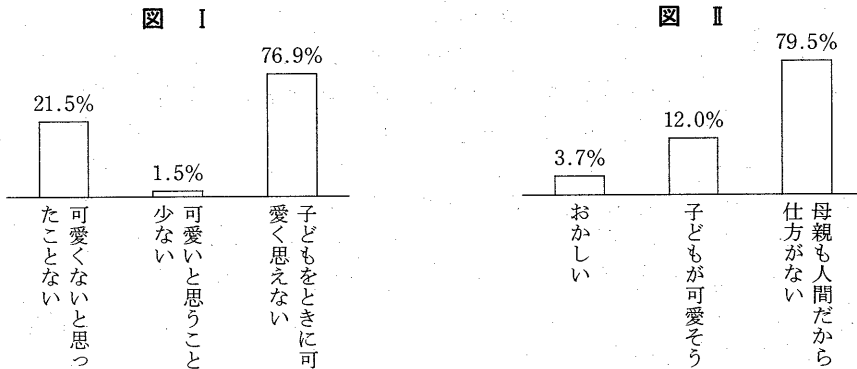
母 親 の 意 識		戦 前	戦 後
育 児 の 評 価	育児は有意義な仕事である	74.0%	40.8%
	育児は自分にとって生きがいであり、自分の成長にもプラスになった	78.0%	34.7%
	自分の生きがいは育児とは別である	20.0%	61.2%
母 の 心 理	なんとなくいららする	34.7%	83.7%
	自分が世の中に遅れてしまうという気がする	16.0%	44.9%
	関心が子どもだけに向いて視野が狭くなる気がする	18.0%	49.0%
	育児ノイローゼに共感する	4.0%	59.2%

ご覧のとおり、変わり様はあまりにも明らかである。今は、育児についての重要性そのものを、まず否定するのである。子育てを生きがいなどは、考えようとしなくなった。六割以上が、

生きがいは別とある。半数近くは、子育てに集中すれば世に遅れる、とさえいう。

本来子育ては、「おとなが生涯にわたって発達しつづける過程のなかで、他に取って代わるものがない貴重な一行程」で、「決して自己犠牲を強いるものでない」(『ヒトはなぜ子育てに悩むか』)のに、子育てなどは自己人間性のマイナス要因、と見るに近く、子育てに縛られるわが身を振り向いてはいららす。子どもは、もはや成長するこの上なく尊厳な命ではない。単に自分の目先の欲を満たす、手段でしかない。小さな命と母なる命の大事な支え合いが、そこには薄れる。子は単なる一つの手だてに過ぎないから、手だてを使う母親と手だての子どもとの間は、常に揺れる。ある時はこんなすばらしい子と熱愛され、またある時はなんて嫌な子、バカな子と見下される。

『子ども白書』(1995年版)に記された資料を見よう。何と、時にはかわいさを捨てる人が76.9%、かわいくないという人1.5%もいるではないか。80パーセント近くの人が、母性愛よどこへということになるのである。しかもこの結果には、「人間だから仕方がない」とばかり容認する姿勢が追い打ちを掛ける。



同じ白書の別図(図II)に目を注ぎたい。愛が揺れ動いても人間だから仕方がないとする人が、80パーセント近くもいるのである。これでは、大事な子育てに手抜きがあつたり、照る日、曇る日のご都合主義がはびこって、何の不思議もあるまい。マンションも手抜きをすれば、水漏れ、壁のひび割れなどの揺り返しに遭う。子育ての、人づくり、命を育てる仕事の手抜きは、一体どうなるのか。

「朝もなかなか起きない子」、「朝から何か疲れている子」、「朝から食べたがらない子」、「幼稚園・学校で友達と交わらない子」、「あいさつ・返事や反応のない子」、「独りでさっさとやらない子」、「元気に遊びたがらない・身体を動かしたがらない子」、「そばで友達が困っていても何も感じない子」、こんな姿に出来た子が果たして目の前にいないであろうか。

子どもに身を立て名を揚げるコースに入ってもらい、自分の望みを遂げたいと願うお母さんには、受験学習上手な塾の広告・偏差値の高い学校の名・おしゃれなマダムのカッコよいファッションなどなど飛び交う情報は多い。そうした情報に、お母さんはいやが上にも漬かる。日頃の話題も、いつしかそんなムードに染まる。

こうしたお母さんには、こだわりが生まれて行く。わが身に添って、ブランド校に入れる子、偏差値の高い子となるよう期待する。そして期待は、やがてこだわりによって信仰に転じる。信

仰となれば、信じている事柄だけが絶対、ありがたいものとなる。自分の基準にないものは、目には入るはずもない。

学校の全人教育も、友人も、先生も、視界から消え去るのである。

### 徹底したい母親（いや両親）教育

精神科医の神谷美恵子は、かつて教育学者の周郷博との対話で、「母親の欲がほんとに子どもを曲げますね……子どもの成長を止めてしまったり、つまり欲というのは、安心したいという欲ですね、これが母親にドカンときてる……」と話した。

母親いや父親も含めて、家族エゴの非常に強い時代となった。幼稚園に子どもと一緒に来た母親が、一切、近くの子に声も掛けずそそくさと帰る。塾・お稽古のためという理由で、わが子の放課後の活動をすべて止めさせて、母は連れ帰る。今や家族エゴは、一、二に止まることを知らなくなった。

今、若い父親・母親にとって必要なのは、子どもをめぐる意識の啓蒙以外に何もありません。

幼稚園・小学校を別々に、さらには幼・小の共催で、子育てについてのテーマ別の年間計画を立て、まず両親の学級を強力に進める必要がある。

講師は、当該機関の先生はもとより、市・区内・他府県の先生、父母の中から推薦された人、専門の学者・評論家、教育委員会の先生などなど、多様な範囲にわたることが望ましい。

企画としては、小学校・幼稚園の合同、縦のつながり強化というのも、意義深い。その意味では中学関係も、一部含めることが考えられよう。PTAも、時には大いに主となるべきである。主催者や開かれる場所（児童館、社会福祉館、図書館など）などいろいろな形を取り、機会が多いのは結構である。あえて話を広げれば、企業の中にも成人学級を設け、若き父・母のために育児・子育ての不安・迷いを取り除くに役立てばこれに越したことはない。

テーマとして考えたいことは、数々あろう。その中で、子どもの自主性、子どもの食事、父親と育児、母親の姿勢など取り上げてみたら、如何であろうか。

#### ■子どもの自主性・自立性

くれない族、指示待ち族など、子ども若者にとっては、ありがたくないことばが流行する。

大学に入ってきた若者に聞くと、よくこういうことを耳にする。「何を勉強したらよいか、わかりません。何をどう勉強するか、教えて下さい」、「問題出して下さい、そうすれば勉強します」という次第である。いかに自主的なものを失っているか、明らかであろう。

またある学生は、こうも言った。「ぼくらは今まで、出た答えの結果だけを一言ボソツと言うことに慣らされてきた。その過程を自分の頭でまとめ、自分のことばであれこれ言わないで済む、これですっかり前進姿勢を失ったのでは……」との話である。子ども自身に、自ら進む勢い・意欲を止めさせてしまった、というのである。

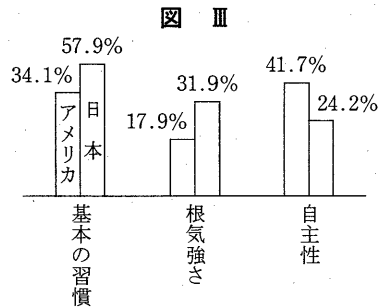
有斐閣の『教育の心理学』という本で、アメリカ、日本の「しつけてほしい大切なこと」として、こんな数字を示している。

日本人は、基本生活の習慣・根気強さを目指しているが、アメリカに比べ、自主性が極めて薄い、というわけである。事情は単純でなかろうが、一つには、日本の母親の察しのよさとその行動の代理を務めるはたらきとが、影響しているらしい。鳴くまで待とう、として、待ち切れない。ついカバーして、子どもの甘えを許す。

これが、どうも日本の母の癖になっている。子どもの迷える姿に直ぐ手助けをしたい。分から



ぬことを聞かれても、時には答えを出さず、調べられる年頃なら、ある資料を与えて自分で調べさせるなど、考えるべき点は多い。



### ■子どもに食べさせたい食事

一頃「カアチャンヤスメ」ということばを、よく耳にした。カレーライス、チャーハン、ヤキソバ、スパゲッティ、メダマヤキの頭音である。

子どもは、もともとそうした類が好きである。お母さんが忙しかったり、自分の時間を大事にし過ぎたりすると、子どもの食事は、ますます偏る。結局人工着色料や甘味や香料、脂肪分を、取り過ぎることになる。アメリカの医者（アレルギー治療研究家）にファインゴールドという人がいる。彼はこの着色料・香料や脂肪分の取り過ぎ、酸性物資の摂取のし過ぎが、子どもの性格を変える、とさえいう<sup>7)</sup>。

子どもが、お母さんの世話を離れカギツ子などで一人していると、つい合成着色料・香料入りの食品と切れない仲になる。ハムもソーセージも、ケーキもクッキーも菓子パン・ドーナツ、すべて大好きな食べ物に、実は赤信号がつく。念入りに賢明な母の目で確かめられ、母のフィルターを通し選ばれることが、望ましい。

河野友美という栄養学者は、日本の伝統食こそ子どもに必要と説いて、こう語る。

「ぜひ必要なのは日本の伝統的な食の体験を親がすることです。日本の味覚で伝統的な食の味を体験する機会を積極的に親がもつ必要があります。」

(『子ども白書'95』の中の「子どもの食生活」)

やはり親が子どものそばにいて、適切な食事を用意してやることこそ、子どもの健全な成長の原点なのである。

### ■積極化すべき父親の育児

厚生省の93年の調査に「全国家庭動向調査」がある。

「子どもの寝かせつけ」、「食事をさせる」、「おむつの交換」などについては、ほとんど父親はやらないの答えが60%と、示される。これでは共稼ぎなどの場合、妻の疲れ、負担の多いこと、火を見るより明らかというほかない。

夫婦の役割・分担につき、さらに賢明な知恵・実践方法に関し、もう少し企業などの講座その他の学習から、ふさわしい助言を得ることが望まれる。また、当事者同士の心置きない話が必要となろう。

## 偏差値魔力を忘れるために

学校教育の中で 今学校で教師は、年にどのくらいテストをやるのであろう。

中学では、中間・期末と称するテストだけで6回、単元ごとの小テストおよそ10回、その他業者の会場テストなど数回で、約20回前後の経験をするようになる。小学校では、学期ごとのテストは中学校ほど定番でないにしても、日常テストでおそらく、中学の20回を優に上回る数をこなしているに違いない。

テストを学習に取り入れるのは、学習活動の評価として重要この上もないことである。テスト抜き<sup>の</sup>学習活動は、考えられまい。だがテストが、単に教師の成績つけの材料になるためだけのものなら、大いに問題がある。まして教師の順位づくり、総合点づくりのお楽しみ道具というなら、お話にならない。

テストは、単に成績づくり、内申書書きの道具ではない。それこそ、重要この上もない、教授者が何をどう教え、生徒が何をどうとらえ、何がどうわからなかったのかを見る、かけがえない資料である。教授者は、自らの教え方をここに振り返り、生徒は自らの学習の不足点、自らの学習の特徴を、ここに自覚しなければならぬ。

その意味では、テストの処理に必要なのは点数よりも、あやまりの箇所の解説であり、今後の学習方法への助言である。

一々のテストに、果たして点数が必要であらうか。点数だけでは、決して生徒のはげまし反省にならない。むしろ、まずい点を重ねてつけられた子は、自分がそれだけのものなんだと、これでもかと知らされる。よい点の子はまた、妙に鼻を高くするすべを身につける。かれらの得るものは、点という数字<sup>かなめ</sup>で人の値打ちを決める心でしかない。

先生は、もちろん要のところこそ点の処置が必要であらう。だが、そのほかはどうしてもなくてはならぬ宝かどうか。つぎつぎとこれでもかと見せつけられる点数から、せめてまず小学校で解放への道を考えたい。その流れがさらに中学へと進めば、これほど結構なことはない。

### ■高校入試の方法を振り返る

九割以上が高校に行く時代である。わずか数パーセントが圏外となるため、いやなムードの競争に泣かされる。いけない事に、チャンスは一回に限られる。しかも一度入れば横への動き、再出発はままたらぬ運命が、生徒を待っている。この一回、この入試のために生徒も親も、合否をかけ、人生の運命をかけ、なり振り構わずぎりぎりの勝負に挑む。あとにも先にもこれっきりの、逃げ場のない戦いだけに、親子の気持ちはすさまじいものに違いない。

特に当日近づく頃の親御さんの狂奔ぶりは、例えることばを知らない。出来れば少しでもよい内申点をとばかり、関係者への日参、お願い攻勢は常識を越える。血相が変わるのである。

問題はすべて、一本勝負であとがない、というところにある。

そこで公立高校入試も、大学並にして二分割したら、如何であらうか。チャンスを二回与えてゆとりを持たせれば、親も子も偏差値、調査書の数字の魔物に躍る病が、少しは軽くなるはずである。予算措置、問題作りの苦勞、日程の取り方など、いろいろ懸案はのしかかる。

15の春の涙のすさまじさ、偏差値の一、二点に寿命が動く親子の胸を思うなら、何とか検討だけでも是非やらなければならぬこと、と考える。

### ■焦眉の急を要する中・高一貫教育

近年、いじめ問題、自殺・不登校の問題が、小学生・中学生の教育事情を暗く取り巻く。

様々な要素、原因(遠因・近因)があらう。要因たるものは、全体的に複雑であり、また個々

のケースに違いのあることも想像される。だが筆者は、その要因の一つに、中学という年齢に人生の一大試練のあることが、大いに関係している、とかがえる。

何しろ中学という年齢は、自我の確立、成長を目指して、一番自分の具合を気にする時である。自分をやたらに自分で意識し過ぎると、劣等感が生まれ、それにさいなまれる。心の動揺は、大きくなる一方である。

こんな時に選りによって、人生天下分け目の大仕事を課せられる。インフェリオリティ・コンプレックスは大火のごとく広がり、身を焦がすことは疑いあるまい。子どもの心は、正に弱り目に祟り目、絶体絶命である。

この心を少しでも穏やかに静めるには、余計な重圧を、せめて一つ除いてやるほかなかりう。具体的には、この劣等感の多難期の受験を避けさせることこそ大事、と思考する。すなわち、現状の中・高を一貫教育に編成し、受験は小学校終了時12歳に経験させるべきと信ずる。

すでに多くの私学が、敷地・キャンパスも共有という利点を活かし、一貫教育を華々しく成功させている。公立高校にあっても、出来ぬはずはあるまい。実現を図る大きな悩みは、何といってもキャンパス・施設の確保にある。現状の中学を、各都道府県、各市町村でどう使えば活きるのか、また残余の施設が生じるなら、どんな目的の何に使うか、大いに知恵を集めて検討しなければならぬ。

まず各都道府県各地区の教育委員会が組織を作り、足元から案を固め、さらに国単位レベルの委員会がシミュレーションを描いて進めることを、要望して止まない。

一貫教育の実現こそは、この偏差値数字の消滅のきっかけをも、新たに生み出すものになるはずである。

なお偏差値魔手の衰退には、何より各地、各校教師の連帯努力が必要なことは、言うまでもない。いかに業者偏差値を振り捨てて、自らの手になる基準をいかすかに、懸かっている。

### ■社会が捨てよう学歴主義

手元の新聞の求人欄を、目にするがよい。一割近くが、高卒以上と書いてあり、三割は大卒・短大などと書いてある。

これでは何としてでも高校ぐらいは、の気持ちか、かき立てられずにはまい。高校を出たい、高校で勉強したいと思わぬ子まで、みんなの列に並ぶのである。行列が長くなればなるほど、いよいよ熱気はおおられる。無理をしても、みんな列につこうとする。つかない方がよい人も、つぎつぎと付く。

無理をして形だけ付いた人の中には、残念ながら中退予備軍と化すものも少なくない。

企業は、なぜ求人要項に、高卒と書かなければならないのか。まさか、中退者養成の手助けでもあるまい。せめて、高卒同等の力の人、とは書けないものか。出来れば義務教育の終了以上の表示でよい、と信ずる。中卒以上の志願者で、入社後高校での勉強を欲する者には、是非学校へは行かせる余裕を与えたい。

そこから真の人材育成も、生まれて来るはずであろう。

つぎに、新聞社の出す週刊誌にもの申したい。日頃は偏差値などの否定の方向の記事にしながら、受験シーズンの誇らしげな偏差値紹介は、一体なにを意味するのか。

確かにタイムリーに刊行すれば、読者のニーズもあって売れ行きは高まろう。だがそんな僅かの市場ムードに、偏差値騒ぎをさらにおおってよいものか、疑わしいことこの上もない。より広い立場に立ち、涙を吞んで中止の方向に進むべきである。

## 結びに代えて

論というより、いつしかレポートになった。もう少し、研究論そのものを上げて論じたかったが事情により叶わず、残念としか言えない。

しかし今の世にあって問題にしたいと思ったことは、およそ連ねた。女性の意識の変わり様と若い母親の子育て事情であり、その母親達と密着して受験界・教育界を乗っ取ったかの塾の存在への見方である。学校よ、しっかり頼むの声を、かたわらより挙げてみた。

後半に、教育改革、現状打破のための制度論など入れてみたが、調査・考察の不足は否めない。さらに今後、教員採用・養成方法、子どもと遊びの問題さらに中学の問題などを焦点として、拙い筆の進む折があればと念願する。お世話頂いた各先生に、改めて感謝の意を表する。

## (注)

- 1) 1928年生まれのアメリカの言語学者・批評家のノアム・チョムスキーが、特に言語の基本特色として強調した。彼は、ほかの特色に、革新性、本能、生理的刺激からの自由、創造性をあげている。
- 2) NHK世論調査部編『現代中学生・高校生の生活と意識』40ページ参照。
- 3) 『ことばの子どもたち』(童心社)の197ページで著者今井和子が、指摘。
- 4) 詫摩武俊『伸びてゆく子どもたち』(中央公論社)28ページに指摘。
- 5) 1879年生まれ、ドイツのビューラーが、『言語理論』の中で主張した機能である。ほかに彼は、伝達と表現(expression)の二つを挙げている。
- 6) 森久保安美『ことばに力を』(第一法規の161ページに、著者が紹介。)
- 7) 1978年刊ベン・F・ファインゴールド著、北原静夫訳『なぜあなたのお子さんは暴れん坊で勉強嫌いか』という書で、彼は、合成着色料・合成香料の含まれた食物につき、摂取せぬよう詳細に例を挙げて説明している。

〔付記：横田 貢先生は、1996年2月9日に御逝去されました。  
つつしんで御冥福をお祈り致します。——編集委員会〕